

今冬も何人かのインフルエンザ患者を診た。  
40代の男性がお子さんと一緒に来院。

お子さんは1週間前に、体温38.2度で学校を早退し、頭痛・咳・寒気があって来院していた。当日、葛根湯で発汗したが、まだ熱があり、葛根湯を飲んだが、翌日40度だったので病院を受診し、インフルAと判明。高熱だったので、うちに治療に来られず、タミフルを服用し、その翌日には36.9度に解熱した。咳・鼻水、そして中耳炎<sup>ぼい</sup>感じがあるということで再び来院した。今回、父親と来院した時には、咳を訴える状態だった。

父親は4日目の土曜夜からおかしくなり、翌日には38.9度で病院受診し、インフルAと判明。新しく出た抗ウイルス薬と抗生物質を処方された。抗生物質はインフルA治療後に咳が出る人が多いという理由で出されたと言う。翌日38度で、その後、平熱になったが、吐気があり、下痢すると言う。

新聞に、インフル新薬が発売され、それは1回だけの服用だけで済み、人気が集まっているとあったから、このゾフザールが処方されたのだろう。治験では判明しなかった副作用が出る可能性も指摘されているから、父親の吐気・下痢もその可能性があるが、おそらく処方された抗生物質のせいだろう。抗生物質は腸内細菌をも殺してしまうから、腸内環境を悪化させる。

カゼは最初、ウイルスで発症し、次に細菌に感染する場合が多く、以前から日本では、予防的に細菌に効く抗生物質を処方することが多く、抗生物質が効かない耐性菌を発生させる原

因の一つとされている。最近はこうした処方が減ってきたと思っていたが、今回の場合は当にそんな処方がされていた。そのお陰であるかどうか、咳・痰が出るような状態にはならなかったが、吐気・下痢となった。

診ると、邪熱は胸やや下中央部にあり、腹直筋は強く張っている。その裏側である背部肩甲間部に邪熱が及び、硬く凝っている。本人も右肩甲間部がつかいと言う。また、聞くと、唇のから皮が剥がれたと言う。黄連湯証である。

どちらにしろ、これらのために胃腸がダメージを受けた。消化管は唇から食道、胃、腸と一本の管である。胃腸でのダメージが食道では邪熱として現れ、また更に上に達して、唇の皮を剥けさせた。

胃腸のダメージのために張っている腹直筋を補法(正気を補うやり方)鍼で緩め、その背部である腰部が凝っていたのを、補法のお灸で緩めた。肩甲間部付近の凝りは瀉法(邪熱を取り除くやり方)の鍼で緩めた。

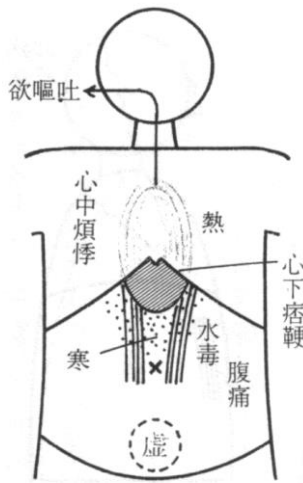
治療後、背部のつらさは楽になり、喜んでいた。黄連湯を薦めた。患者は飲み、2・3日で回復したようである。

この父親は以前から嘔吐症状で治療に来たことがあり、腹直筋も張っていることが多かった。元々、胃腸が弱いところへ、今回は更に抗生物質で悪くしたのだろう。

黄連湯は胃腸を補うと同時に胸の邪熱を取り除く薬方で、口内炎の場合にも用いられる。

(2019年2月立春)

※ 模式図は『傷寒論真髓』(横田観風著)より



〔黄連湯証〕